



郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

駅前思い出と、これから

仙台市民図書館長 湯村 倫子

二十歳まで仙台駅前で生まれ育った私は、今でもまだ、夕方にペDESTリアンデッキを歩くと、ああ、やっと家に帰ってきたという安堵感に包まれます。あたりを見回すと、もはや面影もないほど風景は変貌していますが、その変化の過程も含めて、駅前は、自分の中に沁み込んだふるさとです。

駅を出るとペDESTリアンデッキが壮大に広がる光景は、仙台自慢の一つではないでしょうか。ビルが並び、繁華な駅前でありながら、デッキが空中公園になっているおかげで空が広く、晴れた日は、空の青と駅のオレンジのコントラストがきれいです。

このペDESTリアンデッキを司馬遼太郎さんがべた褒めしてくださっているのをご存じでしょうか。『街道をゆく 26 嵯峨散歩、仙台・石巻』では、「この大構造があるために、仙台駅の駅前の空間は、世界のどの都市にもない造形的なうつくしさがある」「色彩もいい」と熱く感動が語られ、ホテルから書店へペDESTリアンデッキを渡り歩いた様子などが軽快に描写されています。

そんな文豪の美文に比べ、ペDESTリアンデッキにまつわる自分の思い出を掘り返してみても、学校帰りにテレビに間に合うように焦って走って派手に転んだこと、家族で外食に出掛けて祖母と手をつないで歩いたこと、つい最近では、デッキの上を母の車いすを押して、アエル特設センターにマイナンバーカードを作りに行ったこと等々、さもない日常の記憶ばかりです。

今、仙台の市街地では、「せんだい都心再構築プロジェクト」などによって、次々とビルの建て替えが進んでいます。敢えて懐かしい名で言えば、丸光や仙台ホテル、日乃出会館があったあたりにも、ツインタワーや温泉施設の話があるようで、今からワクワクしています。

そんな中、名掛丁地下歩道が改修工事に入ったという情報をネット上でみかけました。これもまた駅前ライフに強烈な印象を残す建造物です。約100年前に線路の西と東をつなぐためにつくられたこの通路については、「榴岡図書館だより第21号」（令和4年9月1日発行）の名掛丁東名会 梅津恵一さんの記事に詳しいので、ぜひご覧ください。

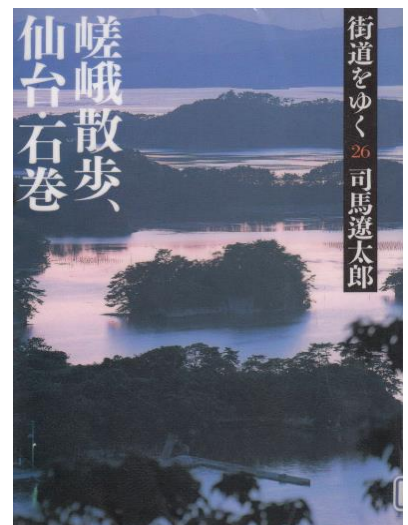
駅前に住んでいたころは、友達の家や買い物に行くため、たまにこの線路下の通路をくぐりました。今見ればたったの数十メートルですが、こどもにとって地下トンネルの先は、不思議な別世界でした。明治20年の鉄道開通によって二分された名掛丁。二十人町生まれの郷土史家、佐々久氏は、その著書『仙台あちらこちら』で「線路が河川のように街を分断している」と表現しています。

近年、駅の東西は、おしゃれな自由通路で結ばれ、「駅裏」は生まれ変わりました。この「郷土のかぜ」が出るころには、名掛丁地下歩道の工事も済んでいるでしょうか。記憶の中の昭和の町は、跡形もなく消えましたが、この地下道がどんな姿で残っていくのか、今度確かめに行ってみたいと思います。

<参考図書>

『街道をゆく 26 嵯峨散歩、仙台・石巻』 司馬遼太郎／著 S915シ

『仙台あちらこちら』 佐々久／著 S291サ



■ある日のレファレンスから

青葉区広瀬町にある「宮城県知事公館」という建物をご存じですか。ある方のレファレンスで、この建物が、かつて児童館として利用されていることがわかりました。

2006（平成18）年12月24日付、河北新報朝刊の「^{たてものがたり}とうほく建物語」の中に、大正時代に伊達家の家臣の屋敷を陸軍が取得し、第二師団長官舎として現在の建物が建てられたと記されています。戦後は米軍に一時接收されますが、返還後、宮城県がこの土地を取得し「児童会館（その後中央児童館と改称）」として1965（昭和40）年、太白区向山に中央児童館の新施設ができるまでの間、利用されていました。中央児童館移転後は、宮城県知事公館として主に迎賓館として利用されるようになり、市民には、あまりなじみのない施設となってしまいました。

もっとも、この記事が載った年に施設の一般有料貸し出しが行われるようになり（現在も有料貸し出しは行っていますが、今後集客施設等として活用するため、令和8年2月以降の予約は一時停止するとのこと）、結婚式や各種イベントなどに利用されるようになりました。現在も、囲碁の対局場として利用されていることは新聞やテレビのニュースで知っていましたが、最初は児童館として利用されていたとは大変な驚きです。

■新着図書紹介（郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書）

『ともに前へ！ 伊達武将隊奮闘記』

佐々木 ひとみ／作 新日本出版社 S68 サ

仙台・宮城を中心に観光PRを行っている「奥州・仙台おもてなし集団 伊達武将隊」。結成のきっかけは、仙台市観光課職員の、伊達政宗の魅力を活かして仙台の観光PRができないかとの一声からでした。

武将隊の設立から出陣するまでの経緯や、東日本大震災を契機として被災した人々に寄り添い元気づけるという新たな役割と東北の観光復興の旗印となって、ひたむきにパフォーマンスする姿などを、仙台在住で児童文学者の佐々木ひとみさんが、15年にもおよぶ彼らとの交流を通して、ありのままの武将隊を伝えています。



『ひとりみの日本史』

大塚 ひかり／著 左右社 S210オ

神話の世界から近代まで、「ひとりみ」の視点から語られる日本史。日本最古の文学『古事記』には“独神”という性別不明な神々がいたとされています。『竹取物語』のかぐや姫や、『源氏物語』の中にも結婚を拒否する物語が描かれており、『徒然草』には、賢人の思想として、ひとりみを肯定的にとらえています。郷土ゆかりの人 只野真葛の著作『^{ひとりかんがえ}独考』は、ひとりを自覚しつつ未来を先取りするような考えで、200年たった今でも高く評価されてます。それぞれの時代、様々な状況のなかで人々はどう生きたのか。ひとりみ思想が、日本の歴史を貫いていたという興味深い一冊です。



■編集後記■ 今回の新着図書紹介で『ともに前へ！ 伊達武将隊奮闘記』を取り上げました。伊達武将隊が活動を始めてから、今年の8月で15周年を迎えましたが、全国の数ある武将隊の中でも、中心となるキャラクターのメンバーが創設時から継続して活動し続ける例はあまりないとのこと。また、震災以降、彼らの左肩には「ともに、前へ 仙台・宮城」と記された肩章がついているそうです。気になる方は彼らの演武を見た際に確認してみてください。ちなみに今秋、市民図書館の郷土史講座として、この本の著者である佐々木ひとみさんと武将隊のメンバーの何人かとコラボイベントを計画しておりますので、ぜひ楽しみにしてください。

発行：仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー

所在地：仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL:022-261-1585